

ぼうさい

2022
No. 105



DISASTER MANAGEMENT NEWS

不屈の大地 Build Back Betterの軌跡

「平成23年7月新潟・福島豪雨」からの復興

平成23(2011)年・福島県

特集

災害の記憶を伝える
「自然災害伝承碑」



内閣府（防災担当）
Cabinet Office, Government of Japan



平成23(2011)年・福島県

「平成23年7月新潟・福島豪雨」からの復興

平成23(2011)年7月、新潟県から福島県の会津地方にかけての地域を集中豪雨が襲いました。福島県会津若松市の会津若松駅と新潟県魚沼市の小出駅を結ぶJR只見線は、洪水による橋梁の流失や土砂崩れによる路盤の崩壊など、甚大な被害を受けました。とりわけ会津川口駅～只見駅間は3カ所の橋梁が流失するなど損傷が大きく、利用者数の減少が続いていることも相まって当初復旧工事が行われず、只見線は廃線の危機に直面することになりました。福島県と沿線自治体はJR東日本に復旧・存続を要請、検討の結果、JR東日本単独での復旧は困難との判断から、福島県と沿線市町が土地や施設を保有し、JR東日本が運行を行う上下分離方式を採用することで復旧が決まりました。

そして被災から11年を経た令和4年10月、ついに只見線は全線での運転を再開しました。地域の住民たちにとっては待ちに待った開通であり、沿線のあちこちに「おかえり只見線」と書かれたのぼりがひるがえり、列車に向かって手を振る人たちの姿も見られました。

復旧にあたってはさまざまな安全対策が施されました。第六只見川橋梁では、只見川の増水とそれに伴う河床洗掘（水の流れにより、河床（河川の底）の土砂が洗い流されること）により橋脚、トラス桁および桁橋が流失したことから、建設時よりも想定水位を上げたうえで、橋脚の位置を洗掘の影響を受けない位置へ移動したほか、橋桁を上路トラスから水位上昇や、洪水による流下物などの影響を受けにくい下路トラスに変更しています。第七只見川橋梁でも同様の措置が取られたほか、第八只見川橋梁においても、橋梁改良や盛土補強などが施されました。

只見線はSNSなどを通じて海外でも人気が高まり、外国人旅行者が多く訪れるようになりました。地元の飲食店や宿泊施設にもたらされる経済効果は小さくなく、存続・復旧は地域の悲願でもありました。復活した只見線の姿はJR肥薩線やJR米坂線など、復旧を待つ全国の「被災ローカル線」にも大きな希望を与えることになるはずです。



本名ダムをバックに第六只見川橋梁を渡る只見線の列車



被災直後の第六只見川橋梁(ダム側から撮影)。橋脚やトラス桁、桁橋が流失している(提供:福島県金山町)



只見駅で発車を待つ列車



沿線のそのここので見られた「おかえり只見線」ののぼり

只見町にある只見駅は東北地方の最西端の駅です。駅舎内の只見線ギャラリーには、土木学会選奨土木遺産に認定された「只見線鉄道施設群」の写真などが展示されています(情報は令和4年11月3日現在)。土木遺産の認定理由は「福島・新潟両県の地域資源の活用や豪雪地帯を結ぶライフラインとして、その機能美や四季折々の風景を創生する」というもので、地域にとっての只見線の重要性がわかります。



只見駅に設置された只見線ギャラリー



表紙写真

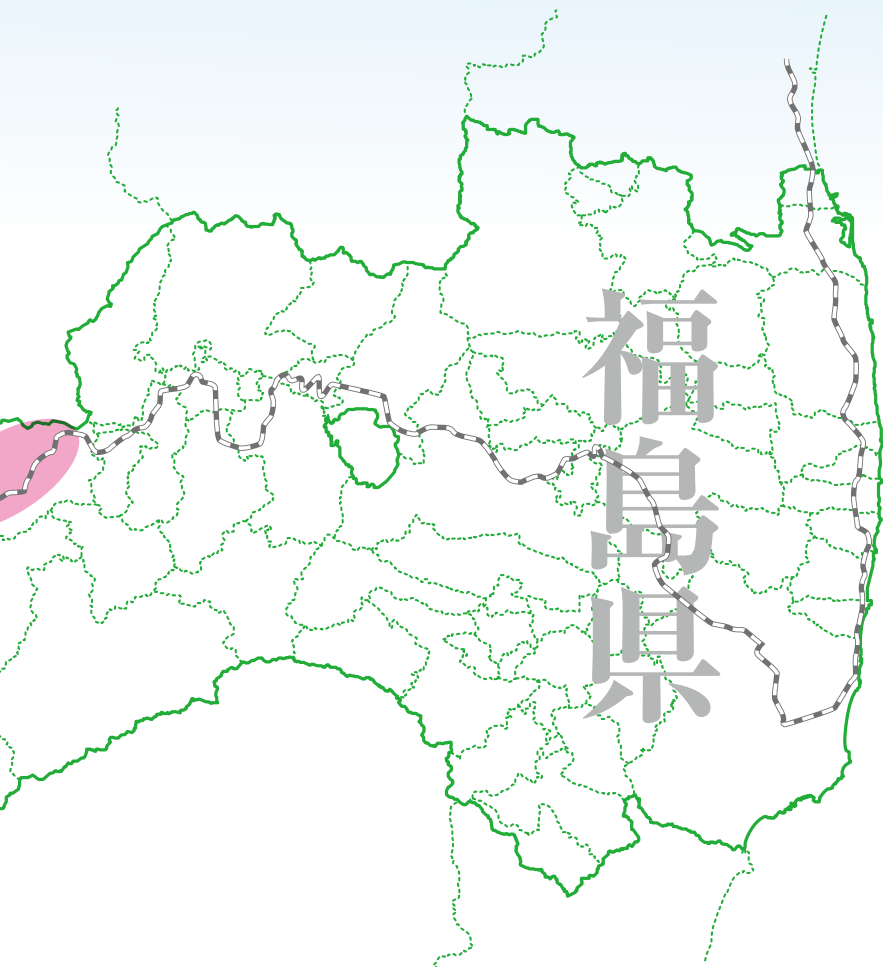
紅葉をバックに第八只見川橋梁を渡る只見線の列車。復旧工事に4年を要したこの橋梁は「只見線鉄道施設群」の1つとして土木学会選奨土木遺産に認定されています。



Build Back Betterとは

「Build Back Better（より良い復興）」とは、2015年3月に宮城県仙台市で開催された「第3回国連防災世界会議」の成果文書である「仙台防災枠組」の中に示された、災害復興段階における抜本的な災害予防策を実施するための考え方です。

本シリーズでは、災害が発生した国内外の事例を紹介し、過去の災害を機により良い街づくり、国土づくりを行った姿を紹介いたします。



CONTENTS

1 不屈の大地 Build Back Betterの軌跡
「平成23年7月新潟・福島豪雨」からの復興
平成23(2011)年・福島県

3 特集
災害の記憶を伝える
「自然災害伝承碑」

9 防災の動き

- ・「防災推進国民大会2022」の開催報告
未来につなぐ災害の経験と教訓
～忘れない、伝える、活かす、備える～
／内閣府（防災担当）普及啓発・連携担当…………… 9
- ・ぼうさいこくたい2022
「集まれ！防災女性職員とその応援団 第2弾」を開催しました！／内閣府男女共同参画局…………… 11
- ・防災×テクノロジー官民連携プラットフォーム(防テクPF) マッチングサイトへのご登録はお済みですか？
／内閣府（防災担当）防災計画担当…………… 12
- ・日本海溝・千島海溝地震への日頃からの備えを大切に！
～北海道・三陸沖後発地震注意情報の運用が始まります～
／内閣府（防災担当）調査・企画担当、防災計画担当…………… 13
- ・「国土強靱化貢献団体」認証（レジリエンス認証）について／内閣官房国土強靱化推進室…………… 15
- ・第9回アジア太平洋防災閣僚級会議への出席
／内閣府（防災担当）普及啓発・連携担当…………… 17
- ・法務省矯正局特別機動警備隊（SeRT・サート）による静岡県での災害復旧支援活動／法務省矯正局成人矯正課警備対策室…………… 18
- ・自治体のみなさま～災害時における食の備えは万全ですか～／一般社団法人健康ビジネス協議会…………… 19
- ・小型漁船への防災情報伝達システムの開発と社会実装への取り組み／北海道根室市歯舞漁業協同組合…………… 20
- ・大槌高校復興研究会定点観測班の歩み／岩手県大槌町防災対策課…………… 21
- ・共同住宅の地震発生時のエレベーター閉じ込め対策を強化します／東京都港区防災危機管理室防災課…………… 22
- ・【東京ホテイソン】の二人が防災マップの説明動画をナビゲート～手話付きの動画で災害の特徴、避難の方法、もしもの時の備えを周知～／岡山県高梁市防災復興推進課…………… 23
- ・車中泊を活かせ！「いの町車中避難所受入訓練」を開催／高知県いの町総務課危機管理室…………… 24
- ・住民と一体となった防災まちづくり／熊本県荒尾市防災安全課…………… 25

26 防災リーダーと地域の輪 第49回
避難機能付き共同住宅で育む共助の基盤
サツキプロジェクト

広島土砂災害

忘れまい8・20

災害の記憶を伝える 「自然災害伝承碑」

住宅地を襲った土砂災害

「自然災害伝承碑」をご存じでしょうか。自然災害伝承碑は過去に発生した自然災害の様子や被害の状況などが記載された石碑やモニュメントです。実際に被災した場所に建てられていることが多いことから、その地域で過去にどのような災害が起きたのかを知る手がかりとなります。また、災害は同じ場所で繰り返し発生するケースが多いことから、地域の防災意識の向上につながる効果があると期待されています。

平成26（2014）年8月、広島市の安佐南区緑井地区・八木地区から安佐北区の可部地区にかけての狭い範囲で記録的集中豪雨が発生しました。この豪雨に伴って地区内の複数の場所で大規模な土石流が住宅地を襲い、死者74名という甚大な被害を記録しています。



平成26年8月豪雨による広島市八木地区の被害状況。赤く塗られた部分は土砂流出範囲（地理院地図）

被害に遭ったのは広島市のベッドタウンで、1970年代以降の宅地開発により人口が急増した地域でした。いずれも山麓に広がる傾斜地で、河川の浸食・運搬作用の他に山か

ら流れ出た土砂などが堆積した扇状地性の地形です。つまりは過去にもこの災害をもたらしたのと同じような現象が繰り返された可能性がある土地だったのです。加えて周辺の山地には花崗岩の風化によりできた「まさ土」と呼ばれる砂状のもろい土壌が分布しており、土砂災害を起こしやすい環境でもありました。実際に平成11（1999）年にも隣接地区で同じような土砂災害が発生しており、広島市内で20名の犠牲を出しています。

現在被災地を訪れると、砂防・治山工事などインフラの整備が進んでおり、多くの住宅が再建されています。その傍らにいくつかの自然災害伝承碑が建てられていることに気づきます。緑井地区の緑井第八公園内にある石碑には



広島市八木地区の県営緑丘住宅付近の土砂災害被災後の平成26年（写真上）と現在（令和4年（写真下））の比較。土石流が通りやすい谷筋は住宅を建てず道路として利用しており、背後には砂防堰堤が築かれている。このすぐ横に自然災害伝承碑が残されている（写真左）



「土砂災害記念碑」と刻まれた下に、「8・20土砂災害でこの地で10名の尊い命を失い、民家も大きく破壊された。この被災地の公園に災害記念碑を建て、哀悼の意を捧げ、災害から身を守る誓いを後世の人たちに伝えていく」と記されています。また、八木地区でも梅林小学校敷地内に「広島土砂災害 忘れまい8・20」の石碑が建てられているほか、被害が大きかった県営緑丘住宅の敷地内などに慰霊碑が設置されています。これらは、被災した地域の方々が、「この場所ではこのような災害が起こる可能性がある」と伝承すること、そして後世の人々がその災害から命を守ることを願って建てられています。

災害は同じ場所で繰り返される

災害の発生には素因と誘因があります。誘因は災害を発生させる直接的な引き金となる現象で、豪雨や地震などが該当します。一方の素因は、地形や地盤、環境などその土地が持っている性質です。たとえば、国内の多くの低地がそうであるように、河川の氾濫により土砂が堆積した土地は、氾濫が起きやすい土地といえます。過去に土砂災害や津波に襲われた土地も、そのような（土砂災害や津波を受けやすい）性質を持つ場所であり、今後も同じような現象が繰り返される可能性が高いということです。

しかし大きな災害の後に、「何十年も住んでいてこんなことは初めて」という住民の声が報道されることがあるように、多くの場合、その土地に住む人々はそうした土地の性質を意識していません。現象としての地震や津波、河川氾濫や土砂災害の発生スパンは数十年から数百年、時には数千年から数万年などということも珍しくなく、人間の人生のサイクルとは必ずしも一致しないためです。だからこそ、「過去にこのような災害が発生したから気をつけて」というメッセージを自然災害伝承碑として残すことに意味があるのです。

坂町に建つ2つの自然災害伝承碑

平成30（2018）年7月の西日本豪雨は中国・四国地方を

中心に西日本の広い範囲に被害をもたらしました。広島県の坂町の小屋浦地区では、天地川で土石流が住宅地を襲い、15名が亡くなっています（広島県資料）。実は小屋浦地区には、100年以上前の明治40（1907）年に発生した土砂災害を伝える自然災害伝承碑が残されていました。その碑文には「今までかつてなかった大雨のために谷の水はあふれ土砂が荒れくるうように流れた。このため一瞬にして家屋の四十三戸はつぶれ命を失った人四十四人、小屋浦地区の悲惨な状況は言いあらわすことができないさまで手をこまねいてなげくのみであった」と記されています。

しかし残念なことに、この石碑の内容は住民に十分に伝承されておらず、西日本豪雨時に坂町が発令した避難勧告（当時：現在は「避難指示」）が出されて2時間20分後までに避難した方の割合は21.8%に止まっていて、再び多くの犠牲を出す結果となってしまいました。これを踏まえ坂町ではこの石碑の隣に、西日本豪雨の被害の状況に加えて、明治40年、昭和20年、昭和40年の坂町の災害履歴を記した新たな自然災害伝承碑と、西日本豪雨時に土石流で流出した巨石を設置し、「災害から自分の身を守るためには、早めの避難をすることが最も重要」と説明を刻字していま



広島県坂町に並ぶ2基の自然災害伝承碑（写真上）。右が明治40年の災害、左が平成30年西日本豪雨災害のもの。土石流で流出した巨石が一緒に置かれている。敷地内には「災害伝承ホール」も建てられ、坂町自然災害伝承公園として整備されている（写真下）

す。併せて災害の教訓を伝える「災害伝承ホール」が建てられ、坂町自然災害伝承公園が整備されました。伝承ホールには被災者の体験談も寄せられており、再び犠牲が出ないように災害を未来へ伝承する意思が示されています。

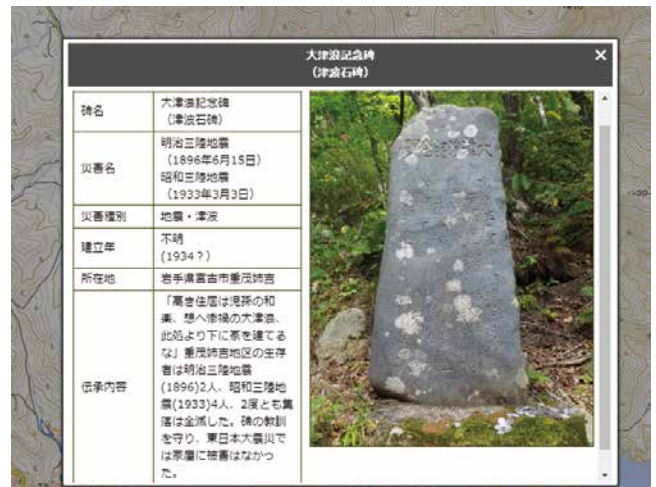
「此処より下に家を建てるな」

平成23（2011）年3月に発生した東日本大震災（東北地方太平洋沖地震）では東北地方の太平洋岸を中心に広い範囲に大津波が押し寄せ、甚大な被害を記録しました。青森県から宮城県にかけての沿岸部（三陸地方）は繰り返し津波災害に遭っている地域で、明治以降だけでも明治29（1896）年の明治三陸地震津波、昭和8（1933）年の昭和三陸地震津波、昭和35（1960）年のチリ地震津波に襲われてきた歴史があり、津波の自然災害伝承碑が多く残されています。



三陸地方には東日本大震災以前から明治三陸地震や昭和三陸地震、チリ地震など多くの津波に関する自然災害伝承碑が残されていた

岩手県宮古市重茂の姉吉地区は明治三陸地震と昭和三陸地震の津波で集落が全滅しています。その後わずかな生存者が（漁業を営んでいるにも関わらず）500m離れた高台で集落を再建し、津波が到達した場所に「大津浪記念碑」を建てました。その碑文には「此処より下に家を建てるな」と刻まれています。東日本大震災の大津波は姉吉地区で38.9mの遡上高（岩手県資料）を記録しましたが、碑の手前で止まり、高台の集落は被害を受けることはありませんでした。碑に刻まれたメッセージが集落を守ったのです。



宮古市重茂姉吉地区に残されている自然災害伝承碑。碑文には「此処より下に家を建てるな」と刻まれており、住民はその教えを守り、姉吉集落は東日本大震災で被害を受けなかった（地理院地図）

身近にある自然災害伝承碑

首都・東京にも多くの自然災害伝承碑が残されています。もっとも多いのは大正12（1923）年の関東大震災に関するものですが、それに次ぐのが、高潮の碑です。江東区の木場地区には江戸時代に建てられた「波除碑」が2つ残されています。寛政3（1791）年、深川洲崎一帯が高潮に見舞われ、多くの死者行方不明者が出たことから、浸水した地域の両端に碑を建てて後の水害に備えたものです。同じく江東区内には大正6（1917）年の高潮災害の碑が複数残されており、江東区がたびたび高潮に見舞われていた事実を示しています。



東京都江東区に残る「波除碑」のひとつ。江戸時代に建立されたもので、その姿は原型をとどめていないが高潮災害（当時は津波と同様に解釈されていた）の痕跡を示す貴重な碑



狛江市の多摩川の河川敷にも自然災害伝承碑が建てられています。「多摩川決壊の碑」と刻まれたこの碑には、昭和49（1974）年の台風16号による多摩川の増水で堤防が決壊し、家屋19棟が流失する被害があった事実が記されています。住民は避難を終えており死傷者こそ出なかったものの、住宅が流されていく光景がテレビで生中継されていたことから、全国に大きな衝撃を与えました。

現在では堤防も強化され、被災現場にも住宅が建ち並び、当時の傷跡を感じることはありません。その後多摩川の堤防は決壊しておらず、多摩川水害は人々の記憶から薄れつつありますが、同じような災害が今後も発生しないとは限りません。取材時に碑の近くで子供を遊ばせていた近隣の家族連れに聞いてみたところ、「当時のことはリアルタイムで経験していないものの、碑文を読んだことで水害のことを知っている」と話しており、碑が災害伝承の重要な役割を果たしていることが確認できました。



東京都狛江市の多摩川河川敷にある「多摩川決壊の碑」。昭和49年の多摩川水害の教訓を残すために建てられた



静岡市葵区長沼に残る「七夕豪雨洪水之碑」。令和4年9月の台風15号でもこの場所は浸水を記録している

直近の水害として記憶に新しいのが、令和4年9月の台風15号による静岡の浸水被害です。静岡市内では清水区の巴川流域を中心に最大で2m（静岡大学防災総合センター調べ）を超える浸水に見舞われました。同地区は昭和49（1974）年の「七夕豪雨」でも広範囲の浸水被害を記録しており、令和4年台風15号の被害はそれに匹敵する規模とされています。

静岡市内には七夕豪雨の自然災害伝承碑が残されています。このうち葵区長沼地区の公園に建てられている「七夕豪雨洪水之碑」には、「この碑は石柱の高さまで浸水した」と刻まれています。この公園は令和4年台風15号でも「膝上程度まで浸水した」（近隣住民）とのことで、浸水深こそ当時ほどではなかったものの、碑文の伝承を証明する結果となっています。

自然災害伝承碑を地図に掲載

広島県坂町の事例がそうであったように、自然災害伝承碑が残されていても、その存在や内容が住民に伝わらなければ効果はありません。国土交通省国土地理院では、令和元（2019）年から、自然災害伝承碑を地図に掲載し、災害教訓を周知・普及する取組を行っています。新たに「自然災害伝承碑」の地図記号を制定し、2万5千分の1地形図及びウェブで公開している「地理院地図」（<https://maps.gsi.go.jp/>）への掲載を開始しました。さらに令和3年11月からは「ハザードマップポータルサイト」（<https://disaportal.gsi.go.jp/>）でも見られるようになっていきます。



地理院地図での自然災害伝承碑の表示例。左側のメニューから「災害伝承・避難場所」の中の「自然災害伝承碑」を選択して表示する（国土地理院提供）

ウェブ地図の利点は、スクロールしながらシームレスに地図を見られること、そしてクリックにより関連情報を表示できることです。地理院地図では自然災害伝承碑の記号をクリックすると、碑の名称と対象となる災害、碑の写真が表示されます。さらに写真をクリックすることで、災害種別や建立年、所在地、伝承内容を見ることができます。伝承内容は分かりやすく伝わるように工夫して記載されています。

ウェブ地図への掲載により、誰もが公開されている全国の自然災害伝承碑を見ることができるようになりました。自分が住む地域にも、これまで存在に気づかなかった自然災害伝承碑があるかもしれません。是非地理院地図をチェックしてみてください。

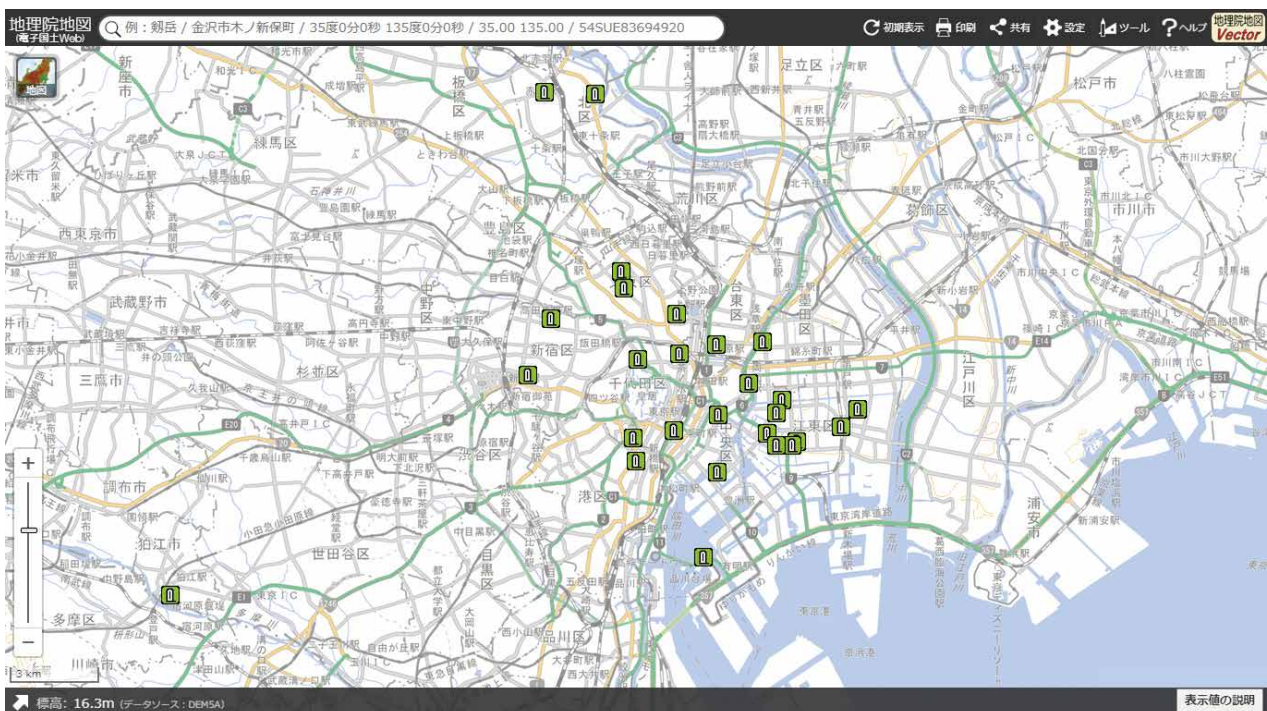
自然災害伝承碑を活用する

国土院では、自然災害伝承碑を地図に掲載するだけでなく、防災教育や地域学習などで活用できるように、掲載されている自然災害伝承碑の活用例 (https://www.gsi.go.jp/bousaichiri/denshouhi_utilization.html)

や分布図、時代別の代表事例など、さまざまな情報をウェブサイト (https://www.gsi.go.jp/bousaichiri/denshouhi_ex.html) で公開しています。

また、さらなる活用を促すため、自然災害伝承碑データのダウンロード提供 (CSV・GeoJSON形式 https://www.gsi.go.jp/bousaichiri/denshouhi_datainfo.html) も行っています。データには①ID、②碑名、③建立年、④所在地、⑤災害名、⑥災害種別、⑦伝承内容、⑧自然災害伝承碑アイコンの位置座標 (10進経度、緯度) が含まれており、災害名や建立年での検索や並べ替えなど、さまざまな活用が可能になっています。

たとえば自然災害伝承碑を災害種別ごとに集計したり、建立年に着目して年代別の基数をグラフ化したりという利用の方法が考えられます (<https://www.gsi.go.jp/common/000243643.pdf>)。また地理院地図では標高データを基にした色別標高図や陰影起伏図、傾斜量図、さらに土地条件図や治水地形分類図、活断層図など、地形や土地の成り立ちを示す地図を表示することができるので、自然災害伝承碑と重ねることで、どんな場所で災害が発生しやすいのかを学ぶこともできます。



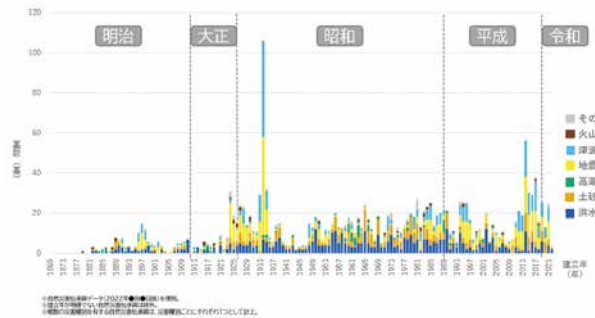
東京23区周辺の自然災害伝承碑の分布 (地理院地図)



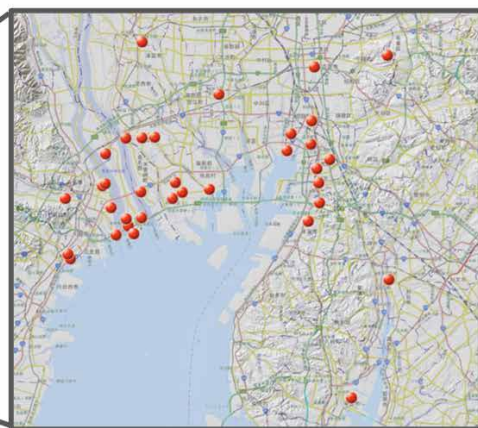
データに含まれる項目
①ID、②碑名、③建立年、④所在地、⑤災害名、⑥災害種別、⑦伝承内容、
⑧自然災害伝承碑アイコンの位置座標（10進経度、緯度）

ID	碑名	建立年	所在地	災害名	災害種別	伝承内容
01202-001	鹿野神社野宮遺跡	1975	北海道函館市山手2-208番地（旧川汲公園）	昭和48年集中豪雨（1973年9月24日）	洪水・土砂災害	昭和48年（1973）9月23日午後から5日にかけて、函館市山手地区に集中豪雨が降り、川汲川が氾濫し、川汲公園に所在する鹿野神社野宮遺跡が水没した。この災害を伝えるために、この遺跡に石碑が建てられた。
01208-001	伊豆野宮遺跡	1992	北海道札幌市東区南一条5丁目	昭和63年集中豪雨（1988年8月25日～26日）	洪水	昭和63年（1988）8月25日午後から翌朝にかけて、札幌市東区南一条地区に集中豪雨が降り、南一条川が氾濫し、伊豆野宮遺跡が水没した。この災害を伝えるために、この遺跡に石碑が建てられた。
01212-001	伊豆野宮遺跡	1992	北海道札幌市東区南一条5丁目	昭和63年集中豪雨（1988年8月25日～26日）	洪水	昭和63年（1988）8月25日午後から翌朝にかけて、札幌市東区南一条地区に集中豪雨が降り、南一条川が氾濫し、伊豆野宮遺跡が水没した。この災害を伝えるために、この遺跡に石碑が建てられた。
01230-001	伊豆野宮遺跡	1992	北海道札幌市東区南一条5丁目	昭和63年集中豪雨（1988年8月25日～26日）	洪水	昭和63年（1988）8月25日午後から翌朝にかけて、札幌市東区南一条地区に集中豪雨が降り、南一条川が氾濫し、伊豆野宮遺跡が水没した。この災害を伝えるために、この遺跡に石碑が建てられた。
01231-001	伊豆野宮遺跡	1992	北海道札幌市東区南一条5丁目	昭和63年集中豪雨（1988年8月25日～26日）	洪水	昭和63年（1988）8月25日午後から翌朝にかけて、札幌市東区南一条地区に集中豪雨が降り、南一条川が氾濫し、伊豆野宮遺跡が水没した。この災害を伝えるために、この遺跡に石碑が建てられた。
01233-002	伊豆野宮遺跡	1992	北海道札幌市東区南一条5丁目	昭和63年集中豪雨（1988年8月25日～26日）	洪水	昭和63年（1988）8月25日午後から翌朝にかけて、札幌市東区南一条地区に集中豪雨が降り、南一条川が氾濫し、伊豆野宮遺跡が水没した。この災害を伝えるために、この遺跡に石碑が建てられた。
01333-001	伊豆野宮遺跡	1992	北海道札幌市東区南一条5丁目	昭和63年集中豪雨（1988年8月25日～26日）	洪水	昭和63年（1988）8月25日午後から翌朝にかけて、札幌市東区南一条地区に集中豪雨が降り、南一条川が氾濫し、伊豆野宮遺跡が水没した。この災害を伝えるために、この遺跡に石碑が建てられた。
01364-001	伊豆野宮遺跡	1992	北海道札幌市東区南一条5丁目	昭和63年集中豪雨（1988年8月25日～26日）	洪水	昭和63年（1988）8月25日午後から翌朝にかけて、札幌市東区南一条地区に集中豪雨が降り、南一条川が氾濫し、伊豆野宮遺跡が水没した。この災害を伝えるために、この遺跡に石碑が建てられた。
01367-001	伊豆野宮遺跡	1992	北海道札幌市東区南一条5丁目	昭和63年集中豪雨（1988年8月25日～26日）	洪水	昭和63年（1988）8月25日午後から翌朝にかけて、札幌市東区南一条地区に集中豪雨が降り、南一条川が氾濫し、伊豆野宮遺跡が水没した。この災害を伝えるために、この遺跡に石碑が建てられた。
01367-002	伊豆野宮遺跡	1992	北海道札幌市東区南一条5丁目	昭和63年集中豪雨（1988年8月25日～26日）	洪水	昭和63年（1988）8月25日午後から翌朝にかけて、札幌市東区南一条地区に集中豪雨が降り、南一条川が氾濫し、伊豆野宮遺跡が水没した。この災害を伝えるために、この遺跡に石碑が建てられた。
01367-003	伊豆野宮遺跡	1992	北海道札幌市東区南一条5丁目	昭和63年集中豪雨（1988年8月25日～26日）	洪水	昭和63年（1988）8月25日午後から翌朝にかけて、札幌市東区南一条地区に集中豪雨が降り、南一条川が氾濫し、伊豆野宮遺跡が水没した。この災害を伝えるために、この遺跡に石碑が建てられた。
01367-004	伊豆野宮遺跡	1992	北海道札幌市東区南一条5丁目	昭和63年集中豪雨（1988年8月25日～26日）	洪水	昭和63年（1988）8月25日午後から翌朝にかけて、札幌市東区南一条地区に集中豪雨が降り、南一条川が氾濫し、伊豆野宮遺跡が水没した。この災害を伝えるために、この遺跡に石碑が建てられた。
01429-001	伊豆野宮遺跡	1992	北海道札幌市東区南一条5丁目	昭和63年集中豪雨（1988年8月25日～26日）	洪水	昭和63年（1988）8月25日午後から翌朝にかけて、札幌市東区南一条地区に集中豪雨が降り、南一条川が氾濫し、伊豆野宮遺跡が水没した。この災害を伝えるために、この遺跡に石碑が建てられた。
01439-001	伊豆野宮遺跡	1992	北海道札幌市東区南一条5丁目	昭和63年集中豪雨（1988年8月25日～26日）	洪水	昭和63年（1988）8月25日午後から翌朝にかけて、札幌市東区南一条地区に集中豪雨が降り、南一条川が氾濫し、伊豆野宮遺跡が水没した。この災害を伝えるために、この遺跡に石碑が建てられた。
01459-002	伊豆野宮遺跡	1992	北海道札幌市東区南一条5丁目	昭和63年集中豪雨（1988年8月25日～26日）	洪水	昭和63年（1988）8月25日午後から翌朝にかけて、札幌市東区南一条地区に集中豪雨が降り、南一条川が氾濫し、伊豆野宮遺跡が水没した。この災害を伝えるために、この遺跡に石碑が建てられた。
01460-001	伊豆野宮遺跡	1992	北海道札幌市東区南一条5丁目	昭和63年集中豪雨（1988年8月25日～26日）	洪水	昭和63年（1988）8月25日午後から翌朝にかけて、札幌市東区南一条地区に集中豪雨が降り、南一条川が氾濫し、伊豆野宮遺跡が水没した。この災害を伝えるために、この遺跡に石碑が建てられた。

自然災害伝承碑のデータをダウンロードして活用することも可能(国土地理院提供)



自然災害伝承碑のデータを活用して明治期以降の建立年別基数のグラフを作成したイメージ(国土地理院提供)



※自然災害伝承碑データ(2022年●月●日版)を使用。

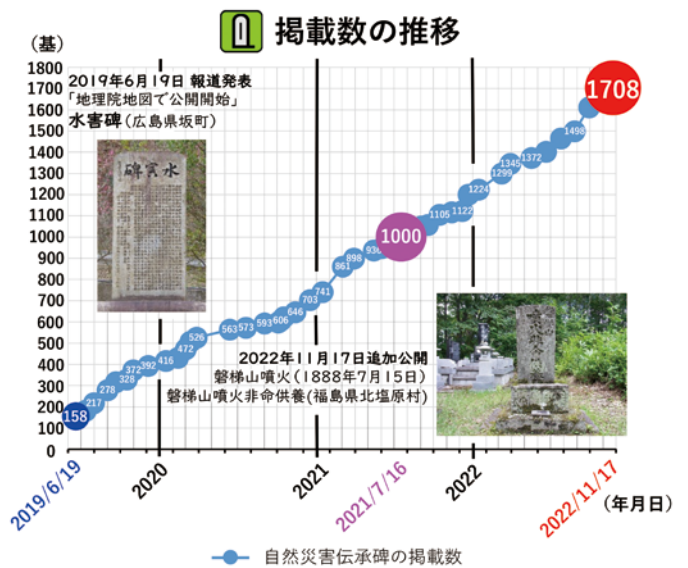
自然災害伝承碑のデータを活用して自然災害伝承碑(高潮)の分布図を作成したイメージ(国土地理院提供)

ひとつでも多くの自然災害伝承碑を共有するために

自然災害伝承碑の地理院地図への掲載は令和元(2019)年6月に始まりました。当初158基だった掲載数は、令和4年11月17日現在全国494市区町村1,708基まで増えています。しかし、掲載されてない自然災害伝承碑はまだ多くあります。

自然災害伝承碑の地理院地図等への掲載にあたっては、市区町村から国土地理院へ掲載希望の連絡を行い、自然災害伝承碑の対象となるか否かを含めて、現況確認や位置情報の取得、写真の撮影など、自然災害伝承碑に係る調査を実施したうえで、申請書を作成して国土地理院への申請手続きを行う流れとなります。自然災害伝承碑を地図上に表示し、多くの人たちと共有するためには、市区町村のご協力が不可欠です。ご理解とご協力をお願いいたします(https://www.gsi.go.jp/bousaichiri/denshouhi_info.html)。災害の教訓を後世に伝え、未来の被害を軽

減するために、自然災害伝承碑のさらなる共有と利活用が進むことを願ってやみません。



自然災害伝承碑の地理院地図への掲載数の推移(国土地理院提供)